

△低調な新黨工作心理(朝日)

政策對立を前提とし、政治運用の責任に當らんとするのが、政黨政派の存在理由であつたとすれば、最早形體の變化はあつても舉國內閣制は確立し、政策選擇の余地も亦非常に狹隘となり、その意味で國策一元化の方向がはつきりとして來たる。數年のわが政界では政黨の立場は脆弱ならざるを得ない。従つて分裂的動向も巨大新黨への願望も、共に衰弱の徴候に外ならず、一つの事の異なる表現と見るべきだ。とすれば政黨にも偉れた人が多いのに、なぜ慢々平として成長し、前進しつゝある國民各階層の、眞に與國的なる動きに着目して思ひ切つてその育成のため合作して來ないか、不思議だ。或者は原因として客觀情勢の未成熟を言ふが、そんな外的事情を見てから内心的決意をするやうな者は、今の時代の方が之を不要としよう。或者は政治感覺の缺除をいふが、感覺で進退するものは、泡沫でも尚激流に浮動する程度の神經をもつてゐることを知るべきであらう。かゝる觀點に立てば、政黨人の錯覺に基づく行動はこの際自肅すべきである。建設的らしく見えて内實は慾望的な思惑行動も亦、その結果を推察すれば慎む方が賢明であらう。といふのは近時歴代内閣を顧りみて政黨抬頭の可能性なきは既に證明済みであるからである。

△其他(略)「不良少年狩」(日日)、「産業の再編成と重點主義」(國民)、「帝都の膨脹對策は如何、施設は舊狀、精勵の目標、税法と税吏」(都)

昭和十五年三月四日

各國新聞論調概要

(356)

- 一、米國の和平工作
- 二、アルトマルク號事件
- 三、獨ソ經濟協定
- 四、獨伊、伊土通商協定

外務省情報部

(執務參考用に付取扱注意ありたし)

目次

一、米國の和平工作

(1) 伊太利

△オツセルバトール・ロマーノ紙

(2) ソ聯

△各紙要約

二、アルトマルク號事件

(1) 獨逸

△フエルキツシャー・ベオバハター紙

(2) 伊太利

△オツセルバトール・ロマーノ紙

三、獨逸經濟協定

(1) 獨逸

△各紙要約

(ロ) 佛 國
△ タン 紙
イ ソ 聯
△ イズヴェスチア紙
四 獨 伊 ・ 伊 土 通 商 協 定
(ハ) 伊 太 利
△ テーヴェル紙
△ テリブナ紙

一、米國の和平工作

伊太利

△オツセルバトーレ・ロマーノ紙（二月二十六日）

「ウエルズの使命は、過般米政府の發表した所に依れば、單に歐洲の現状を調査報告するを目的とするもので、擧議を爲し又は米國政府の名に於て責任を取る權限を有しない趣たか。何人もウエルズが單にアカデミックな談話を爲すために歐洲に派遣されたものたとは考へない。若しウエルズが單なる聴取器たるに止まるなら、其の調査は通常の外交機關の活動と重複する。ウエルズがハルの主要協力者であることに鑑みても、同人の報告が單なる合奏曲に終らないことは之を了解し得やう。一九三八年九月以來、ル・ズベルトは屢々和平問題に關與したか、これに對する歐洲諸國の應酬は種々難多てあり、時には懇篤且つ同避的であつたり

又時には反抗的（例へばヒトラーの如き）であつたか。戦争開始以來右の傾向に一部の變化を生じ、米國官憲に於ても歐洲諸國に對する論議を避け、又獨逸側の反ルーズベルト論調も熄み、同國新聞か米國の二三草案を推奨したことも一再に止まらない。例へば安全地域の設定の如き、却て獨逸の戦争計畫に有利なりと信ぜられた位である。ウエルズは中立國及蘇聯を訪問しないか、米國の輿論が、蘇聯の動向を以て戦争の決定的要素と考へてゐないことは誰しも知る所であり、又中立諸國が假令聯合しても、其の運命を變更し得ないことも亦明かである。要するに、歐洲の現状調査には、今日以上の好時期はあり得ない。米國政府は其の内政に對する戦争の影響如何を知らんと欲すると共に、戦争終了後の新世界建設の爲にも、怪異不可解な今次戦争に通曉することは有益と認められる。」

（以下は非常に薄い文字で印刷された、ほぼ不可読の文章が複数行にわたって続いている）

△同（二十六日）

「既に百六十年以來王座及米國間に存在してゐる正義心を基調とする關係は理想的高所に達してゐるか、地上最大の精神國の元首及世界最強國の一の元首の眼に映したものは、我等の世界か多數の噴火口より黒煙を噴出し或は部分的には溶岩の既に流出せる一大火山地帯の淵を呈してゐることである。尙斯る高所より見て、宗教愛に依り崇高化せられ又社會愛に依り強化せられたる右の共通信念は、慎重なる協力を要し且つ緊急ならしめた。テラー派達による米國側のイニシアチフは何等秘密の目的を伴つてゐない。其の目的か高遠なればこそ諸國民の賛同を得た譯であり、外交上のイニシアチフにして右に優るものは未だ會てない。」

ソ 聯

△各紙要約

△各報要略
のトエ、米國の参戦は、歐洲の前途に非ずして、歐洲戦争の將來に在る。ウエルズの使命は、戦争擴大計畫の援助に對し米國か如何なる報酬を受けられるかを調査するに在る。」
ニアルトマルク號事件
獨逸
△フエルキツシャー・ペオバハター紙

ソ聯では、ウエルズ來歐に關しトルード紙、クラースナヤ・ズヴェズダ紙、モスコフスキー、ボルシエヴィク紙が論評を掲げてゐるか、右を綜合するに次の如し。

「大戦當時米は、ハウス大佐を派遣して、米帝國主義が戦争に干渉する最も有利な時期を調査せしめ、交戦國が疲弊困憊に陥つた時期に参戦し、多大の利益を収めたか、現在交戦國は未だ疲弊してゐない。今回米國がウエルズを派遣したのは、自國の参戦以外の方法に依り、参戦と同一の利益を獲得せんとするに在る。米國財閥の興味は、歐洲平和の前途に非ずして、歐洲戦争の將來に在る。ウエルズの使命は、戦争擴大計畫の援助に對し米國か如何なる報酬を受けられるかを調査するに在る。」

ニアルトマルク號事件

獨逸

△フエルキツシャー・ペオバハター紙

アルトマルク號事件に關し二十一日のフェルキツシャー・ベオバ
ハター紙は、「和蘭、瑞西政府が中立の態度を維持してゐるに拘ら
ず、ノイエチユーリツヒ紙、ルツセルナー・ターゲブラツト紙、
ガゼツト・ド・ローザンヌ紙、テレグラフ紙等を始め諸國新聞が
反獨的感情に驅られて自國の中立を忘れ、英國に加擔する趣旨の
論評を掲げ、自國政府の方針を覆すやうな態度を示してゐること
を攻撃し、今日の反獨的輿論は明日の政府の方針となるのではな
いか、之等中立諸國の眞意は何れに在るかを疑はざるを得ない」と
論じてゐる。

伊太利

△オツセルバトーレ・ロマーノ紙

伊太利各紙は、アルトマルク號事件に付ては比較的公平に關係國
の講評及輿論を傳へてゐるか、法王廳機關紙オツセルバトーレ・
ロマーノ紙のみは二十日及二十一日に亘り英國を支持する論評を

[illegible]

一九三三年に於ては蘇聯の總輸入額の三割以上を、一九三一年乃至一九三三年には同じく四割以上を輸出し、獨側の輸入も略々同様の経過を取つた。右の事實に依つて、兩國經濟の依存性大なることは明かであり、蘇聯は無盡蔵に原料品を有するに對し獨逸は現在戰爭中にも拘らず各種工業製品に付蘇聯の要求に充分應ずるだけの生産力を有してゐる。」

獨逸は一九一三年、蘇聯の對外輸出總額の三分の一を輸入し、其の對蘇輸出は同國輸入總額の五割を占め、又一九二一年乃至一九二二年に於ては蘇聯の總輸入額の三割以上を、一九三一年乃至一九三三年には同じく四割以上を輸出し、獨側の輸入も略々同様の経過を取つた。右の事實に依つて、兩國經濟の依存性大なることは明かであり、蘇聯は無盡蔵に原料品を有するに對し獨逸は現在戰爭中にも拘らず各種工業製品に付蘇聯の要求に充分應ずるだけの生産力を有してゐる。」

（右側ページに印刷された、非常に小さい文字の文章。内容は読み取れない。）

△ 同

「獨蘇貿易は一九三一年に輸出入總額の最高點に達し、對蘇輸出七億六千二百七十萬麻克、輸入は三億三百五十萬麻克に上つた。尤も輸入のみに付て云へは一九二七年乃至一九三〇年は一九三一年度より多額に上つた。今次協定に従ひ一九四〇年度貿易額は十億麻克を超過する豫定で、之を現狀に比すれば實に十倍の増加である。のみならず一九三〇年末に比し現在物價が低落してゐることには注意に値する。本年度貿易は將來益々發展せんとする兩國貿易の出發點となるであらう。」と論じてゐる。

佛 國

△タン紙（十四日社説）

「獨蘇提携が初めは蘇聯に大きな利益を與へたことは波蘭、バルチックへの領土的、政治的進出に見ても明かである。其の間獨逸

ソ
聯

は一面政治的に退却し、他面蘇聯の生産及運輸能力不足の爲物資も疎に得られない有様であつたか、芬蘭戦の失敗に依つて獨蘇の立場は反對になり、獨逸は蘇聯を技術的に助けつつ將來の獨蘇經濟プロットを獨逸の利益本位のものにしようとして居り、今回の協定も其の意味を含んでゐるものと見られるか、獨蘇現在の生産運輸能力は貧弱であるから、本協定は差當りこけ感しに過ぎず、獨蘇經濟協力か其の効果を現すには相當時間を要すべく、其の前に英佛側の勝利に依り獨蘇共に崩潰せしめらるへきてある。」

△イブヴェスチア紙一十六日社説

「今次協定に依り蘇聯は獨逸に食糧品を含む原料を供給し、獨逸より武器を含む工業製品を受けることとなつたから、今日英佛との貿易皆無となつても、蘇聯は是に依つて何等の痛痒を感じない

四 獨伊、伊土通商協定

伊太利

△各紙要約

蘇側の註文を解約した英佛は、是に依つて自ら損失を蒙つたのである。今や經濟上外國依存から離脱せる蘇聯は、英佛と貿易を行はなくても獨逸との貿易増進に依つて自己の經濟を發達せしめ得るのであり、今次協定に依り獨蘇親善關係は益々鞏固となり今後兩國國交發展に確乎たる地盤を有することとなるであらう。」

伊太利各紙は、獨伊通商協定の締結につき、右協定の重要性及右協定を齎したる兩國間の協力の精神を強調し、二十五日のレスト・デル・カルリノ（ボローニャ）は「兩國關係の背後に相互的信賴及友好の雰囲気が存在すること、經濟方面に於ても獨伊間協調は圓滑に行はれて居る」旨を高調し、又同日のアンサルド（テレグラフォ）は「開戰當初獨逸は攻勢に出なかつた結果、形勢は英佛側

に有利に進展するものと見られたか、二月十三日の獨蘇經濟協定の成立に依り形勢一變し、規律及統制ある獨逸は、蘇聯邦、伊太利との關係及東南歐洲をも利用して、結局長期戰に勝利を占めやう」と論じてゐる。

他方二十三日の各紙は、伊土通商協定の締結を何れも小く取扱ひ、獨伊協定との對照が目立つてゐるか、これは協定自體の價値の外英佛牽制の宣傳も加味されて居る。昨年十一月のチアノ外相の演說後本年一月頃迄に比すれば、此の數週間の新聞の調子は大體獨逸に對し友好的となつたやうに認められる。

△デーヴェレ紙（二月二十六日）

「英國を圍繞する海上は日毎に危險を増加し、伊太利商船も四隻犠牲となつたか、斯の如き狀態か今次の獨伊協定に於ける國境運輸を強化せしめたことは明白であつて、これは今や殆ど繼續不可能となつた兩國間の海運に代るに至つた。英佛紙に依れば、歐洲

（右頁の文字は非常に淡く、ほとんど読み取れない。縦書きの文章であることが推定される。）

一般に亘り鐵道車輛が缺乏してゐるか、これは英佛宣傳好材料の一であつて、伊太利に關する限り英佛は幻滅を感じるであらう。目下伊太利の貨車は無慮十三萬輛に及び、必要の場合にはアルプス通路に依る現在の輸送量を四倍化することを得やう。因に伊太利の西部國境以外のアルプス諸通路に依る貿易は、一九三八年に於て輸入約五百萬噸、輸出二百五十萬噸を示してゐる。今次の協定は斯の如く大なる可能性を具體的基礎とするものであつて、此の分野に於ても兩國間の連帶的協力を鞏固ならしめるから、兩國相互の經濟關係は更に一層増進するであらう。

△テリブナ紙（二十六日）

伊獨兩國の一九三九年の貿易を見るに、之を一九三三年に比較すれば正に三倍に當り、國際情勢上の重大障礙があるに拘らず其の増加に確實性があることは注意すべきである。コミュニケ中にムツソリーニ首相は本交渉を中止し云々の文句があり又一「連帶的

一、（一） 凡屬本國之民，其在本國境內者，其法律地位，應與本國民無異。
 二、（二） 凡屬本國之民，其在本國境外者，其法律地位，應與本國民無異。
 三、（三） 凡屬本國之民，其在本國境內者，其法律地位，應與本國民無異。
 四、（四） 凡屬本國之民，其在本國境外者，其法律地位，應與本國民無異。
 五、（五） 凡屬本國之民，其在本國境內者，其法律地位，應與本國民無異。
 六、（六） 凡屬本國之民，其在本國境外者，其法律地位，應與本國民無異。
 七、（七） 凡屬本國之民，其在本國境內者，其法律地位，應與本國民無異。
 八、（八） 凡屬本國之民，其在本國境外者，其法律地位，應與本國民無異。
 九、（九） 凡屬本國之民，其在本國境內者，其法律地位，應與本國民無異。
 十、（十） 凡屬本國之民，其在本國境外者，其法律地位，應與本國民無異。

225

昭和十五年三月八日

各國新聞論調概要

(357)

△汪政權と日米關係
△ウエルズ訪獨

外務省情報部

(執務参考用に付取扱注意ありたし)